



第38回 上越市公文書センター出前展示会 (8月9日から8月31日まで)

「謙信公祭のはじまりと100回の歩み」

謙信公祭のはじまり

今年で100回を迎える謙信公祭。そのはじまりは大正15年(1926)に^{さかのぼ}ります。当時の高田市長・川合直次^{なおじ}は、かねてより謙信没後350年を記念した祭典や、謙信公をしのぶ毎年の祭典の開催を考えていました。大正14年12月14日夜、市長が出席した高田義士会(赤穂浪士討入をしのぶことを趣旨とした会)^{さわかい}の茶話会^{やしな}の席上において、「郷土精神を養うことをモットーとして上杉謙信会を来年度より実行することに可決」したとの記事が高田新聞^{大正14年12月16日}にあります。

同じころ、高田市連合青年会から謙信公祭の開催が提起^{ていき}されました。大正15年7月14日の高田新聞・高田日報は、「春日山上^{おい}に於て民衆的大祭^{たいさい}を行ひ、以て毎年の恒例としやうとする運動が起こされたのは喜ばしい」など川合市長の談話を報じ、謙信公祭開催が高らかに発表されました。

開催日は9月13日と定められました。この日取りは、上杉謙信が天正5年(1577)の能登出陣の最中^{ななおじょう}、七尾城外^{くがつじゅうさんや}で「九月十三夜」の詩を賦^ふした^{詩や歌を作ること}とされることにちなんでいます。

8月9日に高田市役所で開催された祭りの準備委員会では、「主催は高田市・春日村青年会とし直江津青年会に交渉し主催者に加盟を勧誘する」^{高田日報 大正15年8月10日}ことが確認され、これを受けて直江津町青年会が主催に加盟したことにより、高田市・直江津町・春日村の三青年団の主催により開催されることとなりました。

9月6日、同じく高田市役所で開催された準備委員会では、行事の内容について、午後5時から^{さいしき}祭式を執行、7時から講演会、9時から余興^{よきょう}としてすもう、活動写真、剣舞、獅子舞、天狗舞、^{おいわけ}追分、^{ぼんおどり}盆踊、^{おひだり}仮装行列の実施が決定。仮装行列の入賞賞品などについて最終的な確認がされました^{高田日報 大正15年9月8日}。

第1回謙信公祭 山を挙げての大賑い

第1回謙信公祭は大正15年(1926)9月13日、夕方から夜にかけて春日山神社を中心に^{きょこう}挙行されました。午後3時ごろから学生らが続々と春日山に登山。5時から玉串奉奠^{たまぐしほうてん}などの祭典^{さいてん}が厳かに執り行われたのを皮切りに、7時から謙信公の遺徳^{いとく}をしのぶ講演会が行われ、川合市長、藤田高田中学校長、後藤中佐が順に登壇^{とうだん}。最後に元高田中学教諭で高田市史の編さんや上杉謙信の研究に精力を傾けた布施秀治氏^{ひでじ}が熱弁をふるいました。8時20分、講演会は盛況のうちに終了。続いて余興に入り、山中40数ヶ所にかがり火が焚かれるなか、剣舞、各青年会による歌や踊り、すもう、仮装行列などが次々と催され、10時近くには太鼓の音とともに若人たちが盆踊りをはじめました。この盆踊りは以降も^{みやくみやく}脈々と受け継がれ、現在では「大民踊流し」として行われています。11時には仮装行列の審査が終わり、一等から三等までの入賞者に賞品が渡されました。

た。予定されていた行事はここで終了となりましたが、踊りは止まず、深夜まで祭りを楽しむ人々もいたようです。この日のようすを高田新聞(大正15年9月15日)は「**全山全く人を以て埋まるの大盛況**」と記し、高田日報(大正15年9月15日)は「**参拝者や来遊者を以て山上山下連綿として織るが如く**」と伝えました。大勢の人々が郷土の英雄「上杉謙信」の名の元に参集し、祭りに歓喜したことがうかがえます。

第2回謙信公祭 雨の開催

昭和2年(1927)の第2回謙信公祭は第1回を踏襲しつつ、新たな呼び物も加わりました。そのひとつが煙火(=花火)の打ち揚げです。煙火準備の役割は春日村青年会が担い、広く寄附を募ることとなりました。高田日報(昭和2年9月2日)には、「**中頸城郡春日村青年会では来る13日春日山上に於て催す謙信祭に煙火を打揚ぐることとし目下その寄附金を高田市、直江津町、春日村に募集中である**」とあり、集まった寄附により123発の煙火を打ち揚げることになりました。

また、第1回に行われた山中40数ヶ所のかがり火を引続き行うことに加え、中央電気株式会社の寄附により春日山神社から山頂まで電灯を点灯させることとなりました(高田日報 昭和2年9月12日)。この電灯は「アーク灯」という当時使用されていた非常に強い光を放つ照明器具で、同じく今年第100回を迎えた観桜会の初期に、夜桜の照明として活躍した電灯です。

第1回で好評を博した各青年会による歌や踊りは、第2回から「**奉納 郷土芸術**」として行われることになり、高田日報(昭和2年9月9日)には「**謙信祭奉納踊 各村が稽古中**」と、出演する青年会が練習に熱を入れるようすが記されています。



高田日報(昭和2年9月9日)

こうして準備万端整い、前年よりもさらに賑やかな祭りが期待されたところでしたが、当日9月13日は雨が降り翌14日に延期となりました。残念ながら14日も雨天となりましたが、予定していた行事は粛々と進められ、「**山上には大アーク燈を点じ余興には大養村青年会その他の郷土芸術民謡踊の外花火を打揚参拝者多数に達し雨天にもかかわらず非常な盛況を極めた**」(高田新聞 昭和2年9月16日)と報じられています。

【**謙信公祭は雨か風のジンクス**】第2回は雨天延期となった翌日も雨に見舞われるというあいにくの天気でした。以降も雨に降られることがあったようで、昭和10年(1935)、第10回謙信公祭の新聞記事に、「**例年雨風に祟られがちで祭り半ばに滅茶々々になるのが例である**」(高田日報 昭和10年9月14日)との記述があります。

高田日報（昭和 11 年 9 月 13 日）

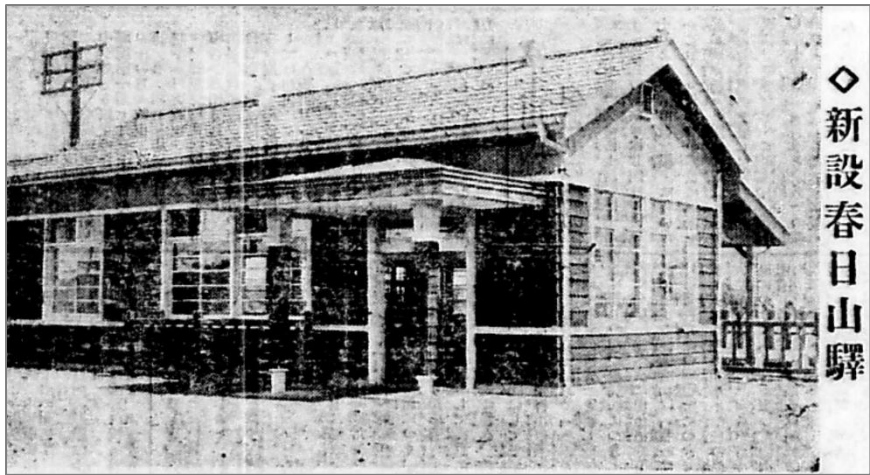
翌昭和11年（1936）、第11回謙信公祭の前日には、翌日の
 天気を案じる記事に高田測候所の予報コメントが掲載され
 ています（高田日報 昭和
11年 9月13日）。天気にもつわる話は昭和30年代に
 も登場し、新潟日報に「**謙信公祭には雨が降ると地元の人
 たちは言っている**」（昭和32年
9月14日）、「**謙信公まつりは雨か風のジ
 ンクス**」（昭和33年
9月14日）と、謙信公祭は晴れに恵まれないという
 言説があることが書かれています。開催日の9月13日は、
 ちょうど季節の変わり目で天候が不安定な時期であったの
 かもしれません。

(3)

りませんが、記事からは、春日山神社前をスタート後、加賀街道を北にひたすら直進、突き当たって善光寺浜から直江津の中心市街地方向へ進み、南へ進路を変え、現在の石橋・新光町あたりを通り抜けて、木田新田の追分地蔵の三叉路から再び加賀街道に入り、春日山神社に戻るコースだったと想定できます。

【春日山駅開業】祭りの準備が進む同じころ、信越線上に新たに建設工事中だった春日山駅が竣工し、11月1日に開業することが決定していました。しかし、謙信公没後350年を記念した盛大な祭典が行われる10月26日に開業を繰り上げてもらいたいと、関係者から春日山駅を所管する名古屋鉄道局に対し陳情が行われました。結果、名古屋鉄道局ではこれを受け、「大いに諒(良しとして承知するの意)としているので11月1日の開通は26日に繰り上げられることに略決定」(高田日報 昭和3年9月29日)したとのことで、春日山駅開業日の決定に、謙信公祭の影響があったことがわかります。

翌日に新駅開業と謙信公祭の開催を控え期待高まる地元春日村のすがたが高田新聞に記され



高田日報（昭和3年 10月26日）春日山駅の写真

ています。「地元春日村ではけふ村を挙げての大賑はひである。新駅の西正面には大アーチが設けられ駅前の広場には天幕を張って祝賀会に備へ、駅から春日山神社までは新たに開鑿(土地を切り開いて道路などを通すこと)された道路に沿って篝火が十間(およそ18メートル)おき位に設けられ早くもこのお祭り騒ぎの賑やかさをしのばせて居る。」(昭和3年10月26日)

新駅開業による効果も相まって祭りは大いに賑い、終了後の翌28日も「参拝者は陸続(ひっきりなしに続くこと)として終日つきず」(高田新聞 昭和3年10月30日)、布施秀治氏の講演内容が高田新聞・高田日報両紙に10日以上にわたって連載されるなど、祭りの後もしばらく熱狂は続きました。

昭和初期の目玉行事「奉納 郷土芸術」

謙信公祭がはじまった昭和初期に人々の注目を集めたのが「奉納 郷土芸術」でした。各町内の青年会などの団体が地元伝わる唄や踊りなどを次々と演じ賞を競うもので、当日は春日山神社境内に設けられた特設舞台が多く観客の拍手喝采に包まれました。

第九回謙信公祭奉納郷土芸術	
△村岡歌舞劇團 戀情しか 春駒	△伊勢音頭くづし
△磯波音頭 安来節踊 笠踊、古代	△新井甚句、おけさ
△中正善寺青年會 天狗と獅子舞	△柳町上組青年會 母いづこに
△大漁節、佐渡おけさ	△花ヶ崎青年會有志 越後おけさ
△花笠踊、古代詞、國定忠臣赤城下	△花ヶ崎女子青年會有志 花ヶ崎
△小唄 島の娘 伊奈節 道中節	△青野青年會 劍の舞
△福島中佐の凱旋	△長正會 追分節、米山甚句
△木田青年會 武士と馬子	△岡澤青年會 古代詞 おけさ
△伊勢音頭	△森かげ會 追分節
△本郷青年演藝部 おけさ 道中	△安来節、古代詞

高田日報（昭和9年9月12日）

昭和9年（1934）、第9回謙信公祭の郷土芸術のプログラムの中に、「中正善寺青年会 天狗と獅子舞」があります。これは昭和51年に「獅子天狗舞」として上越市無形民俗文化財に指定され、現在も地域の人々によって脈々と受け継がれています。

プログラムには「青野青年会 剣の舞」も掲載されています。一時、後継者不足により途絶えた時期もありましたが、平成29年（2017）に結成された青野芸能保存会により復活し、現在も上越市地域の宝として継承されています。第9回謙信公祭の郷土芸術は、青野青年会が見事優勝を果たし、優勝旗が授与されました。



中正善寺 獅子天狗舞



青野 剣の舞

戦争中も継続した謙信公祭

昭和12年（1937）7月に日中戦争がはじまり、さらに昭和16年（1941）12月、アジア太平洋戦争に突入すると、祭り自体が戦時中の情勢を反映したものとなり、郷土芸術も演目に軍歌が見られるようになるなど、段々と雰囲気が変わっていきました。

しかし、この間も祭りは毎年 粛々（しゅくしゅく）と開催されており、日中戦争開戦からほどなくして開催された第12回謙信公祭に向けた協議記録及びアジア太平洋戦争中の昭和19年（1944）第19回謙信公祭に向けた協議記録（公文書センター所蔵）からそのようすをうかがい知ることができます。

「出陣行列」登場

今や謙信公祭にはかせない「出陣行列」が登場したのは、昭和36年（1961）の第36回です。この年が、上杉・武田両軍が最も激しく戦ったとされる第四次川中島合戦が行われた永禄4年（1561）から400年にあたることから、祭りのハイライトとして「謙信公出陣仮装行列」が初めて実施されました。

翌37年（1962）の第37回では、大島市議会議長扮する謙信公をはじめ総勢約120人が、南本町から本町までの高田市街地を練り歩いた光景が広報たかだ（昭和37年10月号）に記録されているほか、新潟日報は「大島市会議長が馬上姿もりりしい謙信公にふんして先頭に立ち、直江山城守ら8人の騎乗幕僚たちも東映撮影所から借りたという本物のヨロイ、カブトに旗差し物までつけて謙信公の回りを守り、続いてやり隊、鉄砲隊、ナギナタ隊、兵糧（ひょうろう）弾薬隊（だんやく）が武者姿で従い、午後1時過ぎ南本町を出発、本町通りをねり歩いた」と報じています（昭和37年9月14日）。

【各地で実施された出陣行列】

高田市と直江津市が合併し新たな上越市が発足した昭和46年（1971）の第46回から数年間は、高田・直江津の両中心市街地を会場に開催されます。

昭和51年（1976）の第51回は、第1回上越まつりの一環として約650人が高田・春日山・直江津の各地区に移動して行列を繰り広げましたが、その後は、現在のように春日山地区のみでの実施となりました。



昭和49年 第49回謙信公祭
直江津中心市街地での出陣行列



昭和50年 第50回謙信公祭
高田中心市街地での出陣行列

開催日の変遷

謙信公祭は例外の年（^{前述第3回の10月26・27日など}）もありましたが、第1回以来9月13日を基本として開催されてきました。しかし、昭和39年（1964）、第39回に「^{のうはんき}農繁期とかち合うのを避ける」ことを理由として、20日間繰り上げて8月23日に変更となりました。

昭和44年（1969）、NHK大河ドラマ「天と地と」が放映され、春日山城や謙信公が全国的に注目されたことにより、この年の第44回謙信公祭は8月23日（土）・24日（日）と会期を2日間に拡大して行われました。

昭和46年（1971）に高田市と直江津市が合併し上越市が発足。5年後の昭和51年（1976）に上越まつりがスタートしました。この年の第51回は上越まつりの期間中に開催され、高田の「祇園祭」と直江津の「港まつり」の中間の7月25日・26日の両日に「謙信公祭」が組まれましたが、その後は再び8月23日に戻りました。^{けんのうまい}献納米合戦など市民参加型の行事が充実し、祭りの規模が大きくなってきた昭和50年代半ば以降になると、会期は2日間が定番となりました。

昭和61年（1986）以降は、お盆の時期に近づけるかたちで8月16日・17日に開催されるようになりましたが、NHK大河ドラマ「風林火山」で謙信公を演じた^{ガクト}G a c k t さんが出陣行列の謙信公役として初めて登場した平成19年（2007）の第82回以降は、8月下旬の土日開催されるようになり、現在に至ります。